
優しい鬼になった訳

楓華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい鬼になった訳

【Nコード】

N3899Y

【作者名】

楓華

【あらすじ】

ずっと同じ夢を見続けている主人公。

その夢の思い出がよみがえる時、訪れるのは幸せか・・・？

魂の夢

生まれ変わりって信じる？

・・・変わりじゃないか・・・
なんて言えばいいんだろう・・・
魂だけが覚えてる過去の記憶・・・

なんて表現すれば良いのだろう・・・

産まれてから16年、物心ついてからの記憶になるから約10年、
毎朝その夢を見て目が覚める。
もちろん、たわいのない夢も見てるんだろうけれど、目覚める前の
5～10分前は必ず同じ・・・
夢って、覚えてるものと覚えてないものがあると思うんだけど、そ
の毎日見る夢は決して忘れて目が覚める事はない・・・

・・・真っ暗闇に一人。
遠くの方からは人でも動物でもない呻き声が聞こえる。
多分、今でいう地下牢みたいな場所に私は一人にいる。
真っ暗すぎて、夢の中の私には辺りの状況さえ見えない。
床は冷たく、肌寒い風をいつも感じる。
けれど、決して寂しい感情が流れてくるわけじゃない。
それは・・・、

夕暮れを知らせる鐘がどこからか聞こえて来る頃に、いつも私を
訪ねて来てくれるヒトが居るから。

その日一日あった事などを優しく語ってくれる。

けれど、やっぱり顔は暗くて見えなくて、その優しく響く声色だけが私を包んでくれていた。

声だけのその人のイメージは、とても優しくそんな空気を持っている男の人……。

長い時間ながときを私はその場所で過ごし、そして永遠の眠りもその場所のようで、最後の時間もあの優しい人はそばに居てくれた。

ただ、目覚めた私がずっと気になる最後に聞こえる言葉……

『一緒に逝けず、すまない』

現在の私いま、天倉古都音あまぐら こしね16歳。

家からさほど遠くない高校に通う、普通的女子高校生。

最近やっと、あの夢は、産まれる前の魂だけの記憶を忘れる事なく持ってきてしまったんだなと、軽く考えれるようになった。

少し前までは、毎日見るには何かあるのかも!?

とか悩んだりもしたけれど、日常になんの変化も影響もなさそうなので、先週の16歳の誕生日を機に深く考えるのをやめた。

っていつても、はじめから、何かあるのかも!？程度だったんだだけだね。

「こゝとね。おはよう。」

駅に向かう道を歩いていると、毎日後ろから元気に挨拶してくる神鬼真琴かみき まことと、

「ふあ……おはよう、古都。」

いつも眠そうに挨拶してくる かみき そつすけ 神鬼奏助。

私の自慢で、幼馴染の双子の姉弟。

姉の真琴は、天真爛漫な美少女。

肌の色は透き通るほど白く、うっすら紅い唇。それに映える漆黒の大きな瞳に艶やかな腰まである黒髪。

物事はあまり深く考えなさそうだけれど、自分の周りにいる人間観察はこの上なく得意かも。

弟の奏助は、どちらかといえば、おとなしい感じ。

185?ある長身で、なかなかの綺麗な顔。肌の色はそれほど黒くはない肌色で、真琴とはまた違う美人な男の子だ。

で、奏助は、考えなさそうというより、何を考えてるか全く読めない。

なのに、勉強は出来て、運動能力も素晴らしいとあれば、周りの女子がほっとかない。一部、運動部の男子にもつきまとわれてるみたいけど。

本人は全くの無関心で、帰宅部。

ま、二人とも少女漫画の主役級な存在だ。

そんな二人とは、家はそこまで近くにあるっていう訳でもないけれど、幼稚園から一緒になって、何故かそれからずっと一緒にいる高校だって、二人なら、名門の高校に行けたのに、私と一緒にいいって言い張ってくれて、私は二人に合わせれず、二人が合わせてくれて今の普通の高校に通っている。

・・・情けない。

「ところで、今日も欠かさず例の夢見たの？」

クリンクリンの大きな瞳で私の顔を覗き込みながら、真琴が聞いてきた。

そう、この双子にもずっと黙っていたんだけど、深く考えるの

を止めた先週の16歳の誕生日が来た時に打ち明けたのだ。

聞いた時の二人の反応は、しばらく二人で顔を見合わせてたけれど、もっと早くに教えてくれたら良かったのにと、真琴には抱きつかれていい、奏助には、何故だか優しい微笑みをもらってしまった。

かなり、深く考えていた事ややっと軽く考えれる様になった事も打ち明けた。

ただ、そうかそっか。と、うなずいてくれるだけだったけれど、変な夢だとか、気にしすぎだとか、言われる訳でもなく、そんな反応が私をホッとさせてくれたのだった。

「うん。相変わらず見てるよ。いつもの最後の言葉まで・・・」

あの言葉には未だに胸が締め付けられる、

『一緒に逝けず、すまない』

低く泣きそうな声で優しく抱きしめてくれたまま、そう言った優しい人の言葉。

「古都は・・・その言葉、どう思ってる？」

奏助に聞かれて、胸を締め付けられる以上の感想を私は語った。

「何でそんな事を言ったのかは分からないけれど、私、あの夢は真つ暗な人生だったけれど、決して寂しくはなくて、最後も幸せで逝けたのよ・・・」

そう、悔いはなく。

その時の二人の表情は見えなかったけれど、ホッと吐息をつくような雰囲気がかがえた。

キーン コーン カーン コーン

「古都音、帰ろう。奏助なんだか先生に呼ばれちゃったから、今日は二人だよ。」

嬉しそうに教室に駆け込んで来た真琴が言う。

さすがに、クラスは三人バラバラ。

真琴が教室に入ってくると、周りの空気が沸き立つ。

やっぱり、美少女なんだよね。

勝手に周りが高嶺の花感覚なもんだから、あまり、話しかけてもこないらしい。

話すと、気さくな子なのに。

「珍しいね、奏助が放課後、呼ばれるなんて」

私の言葉に真琴はにっこり微笑み返すと、

「よっぽど先生嬉しかったのよ、きつと」

？

奏助の事だから、テストでよっぽど良い点とったのかしら？

真琴の言葉の意味は分からなかった。

第一章

その壺

転校生を紹介します。
クラスがざわめいた。

今の世間で言う細マッチョな体系で、顔は奏助は美人系だとすると、彼は男前？って感じだろうか。身長は190？はありそうなし強面。こわもて

私のタイプではないので何とも言えないが、クラスの女子の心を掴んだのは間違いないだろう。

「昔はこの辺りに住んでいました。茨鬼健斗いはらき けんとです。これから、よろしく願います」

挨拶の大きな声にみんな一瞬静かになったけれど、その後は言うまでもなく、彼の言葉からにじみ出た良い人そうオーラでそこかしこから、よろしくと返事が返っていた。

彼はペコッとお辞儀をすると、先生に言われた窓際の一番後ろの席に着くまでに、わざわざ真ん中の列にある私の席の真ん前まで来た。

「俺昔、住んでたって言ったよね？」

「は？」

じーっと見てくるその顔を見覚えがあるか見つめ返した。

じーーーーっつと。

すると、彼、茨鬼くんは、ハッと少し小馬鹿にしたように笑うと、さっさと自分の席に着きに行った。

「なんなの！？あれ！！」

私は昼休みに自分のお弁当を持って、真琴のクラスに行き、一緒に食べようと屋上まで連れて行き、朝の転校生の態度を愚痴っていた。

まあ、私が昔近所にいてた子を忘れているだけかも知れないから、幼稚園から一緒の二人に確認したかったのもあるんだけど。

「・・・いたかなー、茨鬼健斗・・・」

ボソツと、奏助が話す。

誘ったのは真琴だけだったんだけど、いつの間にか絶対に奏助は、真琴のそばにいる。

「だよね！奏助もしらないよね？ね？真琴？」

私の問いに真琴は黙ったままだった。というか、聞こえていないみたいだった。

「真琴？」

私がつまらなく一度問いただすと、真琴は静かに違う質問をしてきた。

「ねえ、古都音は見つめられた時、何も感じなかった？」

質問の意味が分からないけれど、それは異性としてドキドキしたかつて事かしら？

「うん・・・、全く何にも・・・」

私が間抜けに答えると、真琴は優しく微笑んで「良かった。一言だけ言った。」

その式

ガラッ。

保健室の扉を静かに開ける音がした。

窓を全開にして、ばれてはいけな煙草を吸っていた所だった。が、白衣を着た倭椿鬼やまとつばきと名乗るその男は、歳は20代後半に見え、身長は190?近くあり、一見モデルと間違ふような容姿。生徒が入って来たにも関わらず、焦る訳でもなく、自分の椅子に腰かけると生徒の方に向き直った。

「保健室に何か用かい？」

その男が吸う煙草の煙に少し嫌な顔をしたのは、その男にも負けない容姿を持っている奏助だった。

奏助が嫌な顔をしている事に気づいているくせに、わざと煙をふかす。

「はは、すまない。歪む顔もそそるね」と、煙草を消した。

その男は全開の窓の外を見やると言った。

「周りがにぎやかになり始めているね。青・・・」

「はい。まさか茨鬼様もお戻りになられるとは」

サワサワつと秋になりかけの風が部屋に入ってきた。

「茨鬼は俺が呼んだんだよ。力がいるからね」

するどいその男の眼力が光った様に思えた。

「でも、あの方はあまり古都の事を良くは・・・」

言って自分でハツとした奏助が黙った。

男は手の平を奏助に向かってヒラヒラと振って、構わないという仕草を見せた。

「それでも、茨鬼は力になってくれるだろうよ」

その言葉を聞いていたのかいなかったのか、奏助は姿を消していた。

外からの風を感じながら男は煙草に火をつけた。

保健室から教室に戻る廊下の途中で待っていたのは、双子の姉の

真琴だった。

「お疲れさま。茨鬼様の事、椿鬼様つばきご存じだったでしょう？」

奏助はコクンと頷うなづく。

姉はあの方の事を良く分かっている。

報告の仕事をするのは、男である自分の役目だが、姉の方があの方をうまくやり過こせる気がする。

比較的、無表情に見える奏助が何を考えているのか分かるのは、双子の姉の真琴くらいかも知れない。

クシャクシャと奏助の頭をなでると、

「さ、もう夕方よ。私達の姫が寂しがってるわ」

と言つて、古都が待っている教室へ向かった。

教室の前まで来ると、古都の誰かと話す声が聞こえてきた。

相手はもちろん、今日の朝の転校生、茨鬼健斗だ。

「だーかーらー、私は覚えてないんだってば！奏助だって知らないつて言つてたわよ！」

古都が話している間もじーつと彼女の眼をみている。

彼女はあまりに見つめられるからか、少し頬が赤くなっていたが、負けずに見返していた。

その瞬間だった、ほんの1、2秒・・・

古都の瞳が一瞬、薄い紫色に光るのが見えたきがした。

ガタツ。

教室のドアにぶつかる音で、古都が真琴と奏助に気が付いた。

「あ、帰ってきた！奏助、彼が茨鬼君だよ。おぼえてる？」

古都は全く自分の眼の色が変わった事など気づいていないようだった。

真琴と奏助、見つめていた茨鬼、保健室にいる男に、そして、何やら良くない者達までもが気づいたというのに・・・。

その参

「いやー、一瞬もつてかれちまうかと思った」

さっきまで自分を睨みつけてきていた茨鬼が、今度は小馬鹿にした笑いではなく、ガツハツハツと大口を開けて笑っている。

真琴と奏助は何やらダンマリだし。

学校からの帰り道、どうも家の方向が一緒だと云うことで茨鬼もいるわけなのだが。何を言っているのか一向に分からない。

「しかし、これで王子さまも黙って日陰から見守るところではなくなつたみたいだね、なあ、懐かしいね、あだ名だつたっけ？青と赤？」

どうも、教室に入つて来て茨鬼を見た奏助はやっぱり彼が幼稚園にいた子だと教えてくれた。姉の真琴の補足では、当時、何故だか彼に妙なあだ名をつけられていて、綺麗に忘れたかつたらしく、記憶がすぐによみがえつてこなかつたらしいのだが・・・。

それなら私も覚えているはずなのに、全く茨鬼がいた事を思い出せない。

もしかして、二人が思い出さなくなつた位だから、私はもつと思ひ出したくない思い出があるのかも！？頭がもやもやする。

そんな私に彼は、

「いい思い出ばかりが君の魂には残っているんだねー」

と嫌味っぽく言ってきた。

その時、真琴と奏助が同時に茨鬼にするどい視線を送つたかと思つた瞬間、四人の真横に真っ赤なスポーツカーが大きなブレーキ音をたてて止まつた。

驚いたそこに車から降りて立っていたのは・・・。

「・・・？だれ？」

私ははその男の顔を全く知らなかった。

第一印象は、妙に色気のある年上の綺麗なお兄さん。

近くで少しムツとする気配は感じたが、気にせずに真琴に聞いてみた。

「この、格好の良い男の人はいったい誰のお知り合い？」

車が急に止まった事に驚いていたのか、真琴は私の声にハツとして、答えてくれようとした時、横から茨鬼が怒鳴った。

「お前いいかげんにしろよ！」

「青！赤！」

同時にその男の人が、茨鬼と同じ呼び方で真琴と奏助を呼んだかと思ったら、いつの間にか三人の姿は消えていた。

え？え？

どういう事！？

私が驚いていると、その男の人は、長身の体を少し低くして、私の目線に合わせてくれた。

「大丈夫だよ。今は少し戸惑うかも知れないが、今生では、最後まで添い遂げる、必ず」

なにを・・・言ってるの？

こんじょう・・・って、どういう意味！？

この人、私の夢を知ってるの？

他の三人は何処へ行ったの？

頭がガンガン音をたてるような痛みに襲われて、私はそのまま意識を失ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3899y/>

優しい鬼になった訳

2011年11月10日02時26分発行